OSAKA 光のルネサンス
大阪芸術大学グループプロジェクト「アーツ アンド ローズ」

福　原　成　雄・塚　本　英　邦

1.　はじめに

2005 年 12 月 17 日（土）から 12 月 25 日（日）にかけて、大阪市中之島公園で行われた「OSAKA光のルネサンス 2005」に大坂芸術大学プロジェクト「アーツアンド ローズ」として参加した。大阪芸術大学の参加は今回で 2 回目となる。今回は、大阪芸術大学グループ学生からの公募参加を集い、有志学生チームと工芸学科山野宏先生、映像学科浅尾芳宣先生、演奏学科河野正孝先生、環境デザイン学科福原成雄先生とその各学科学生チームが、7 つのステージに分かれて、大阪市中之島バラ園小径から剣先公園にかけて、バラ･ガラス･水・光をキーワードに作品を展示した。

本稿では、大阪市の取組みであるOSAKA光のルネサンス2005の企画概要と大阪芸術大学グループプロジェクトとしての「アーツ アンド ローズ」での、大阪芸術大学の取組み、産官学の連携（産官学の意味するもの)、中之島バラ園制作場所(制作場所の検討、公園担当者との協議)、教員、学生参加呼びかけ（案内方法、案内内容等)、教員、学生企画(企画内容、学生企画内容の選択)、教員、学生制作内容(制作場所、制作方法等)、教員、学生現場装飾(搬入、現場での飾り付け等)、ピーアール(チラシ、パンフレット、看板等)、会期中の対応（案内、誘導、保守、点検)、終了後の対応（片付け、資料整理)、今後の対応、以上について報告する。

2.　産官学の連携

「OSAKA 光のルネサンス 2005」は、ラジオ大阪、大阪市、大阪芸術大学の共同事業として情報を共有し、

図 -1　中之島公園全体図

各々の立場の違いを活かして行われた。ラジオ大阪は、中之島の全体的な企画立案を作成する企画と広報、スケジュール管理をし、大阪市は、会場と成る中之島一帯の公共施設の提供、全体の管理運営調整を行い。大阪芸術大学は、中之島バラ園一体の企画立案、制作、管理運営、学生の専門実技を活かした創作活動、社会経験の場として、教員にとっては教育指導統括の場として行われた。産官学協同のプロジェクトの夫々の役割とチームワークの重要性を多くの学生が身を以て体験することができた。

3.　大阪市の取組み

近年、大阪市は国際集客都市の実現や美しい光に彩られる水都大阪の実現に向け、イベントや祭りを中心に四季折々の魅力を楽しむことができる「四季のイベント」を創出し、1 年を通じてビジターを引きつける魅力ある街づくりに取り組んでいる。OSAKA光のルネサンス実行委員会[1]が主催するOSAKA 光のルネサンスはこの冬のイベントにあたる。[2]

本年で 3 年目となるOSAKA 光のルネサンスは、大阪の中心である中之島に息づく歴史・時代性・自然を生

かした光の祭典として、1年目に54万人、2年目には80万人、3年目となる今年は、90万人と年々集客数が増加しており大阪の冬の風物詩として定着してきている。

川を背景に光と水の調和が生み出す光のエンターテイメントとして、市民が参加する大阪らしさ溢れるイベントとなっている。

また、国際都市づくりの観点から、市内中心部の夜の景観を初めとする街づくりや集客力の向上、市民参加型事業への取り組み、市内中心部の活性化を図ることを目的とした産官学が連携したイベントとなっている。

今回は、大阪市北区中之島周辺において、第一幕と第二幕で構成され、開催期間は、第一幕、2005年12月1日(木)～12月16日(金)、第二幕、2005年12月17日(土)～12月25日(日)で行われた。

＜第一幕＞「ザ・ワールドリンキングツリー」「中之島イルミネーションストリート」「大阪市中央公会堂ライトアップ」

＜第二幕＞「ウォールタペストリー」(shine of heart～心の輝き～)「リバーサイドパーク」「ローズライトガーデン／大阪芸術大学プロデュース」「剣先イルミネーションワールド」(ナイトバザール)「中之島剣先・光のタワー」[3)]

4. 大阪芸術大学の取組み

大阪芸術大学は、OSAKA光のルネサンスの第二幕に大阪芸術大学プロジェクトとして参加した。大阪芸術大学が取り組んだ場所は、イルミネーションストリートとバラ園・剣先公園をつなぐ道になっており暗い道をどのようにして来場者に楽しんでもらいながら歩いてもらうかの誘導を考慮した展示に取組んだ。

展示作品は、作り上げる過程も作品の一部であると学生100人の工夫とパワーで作り上げた。

1)計画概要（バラの小径入り口からバラの高架下）

① バラ園小径入口
・青いバラが咲き誇るエントランスにより、バラの広場、バラの庭、剣先公園への誘導を考慮した展示

② バラの小径
・歩きながら楽しむことのできる光仕掛けのガラス工芸のキャンドルが放つ青く幻想的な空間

③ バラのトンネル
・来場者と共に作り上げる参加型展示

④ バラ園ステージ
・音楽演奏

⑤ バラ園橋
・水に浮かび光るバラ

⑥ バラの庭
・イラクや世界の子供たちへの鎮魂歌を表現
・路上に青く光り映るバラ

⑦ バラの高架下
・学生作品が立ち並ぶアートギャラリー
・映像とミラーボールでヒューマンビューティを表現

2)プロジェクト・コンセプト

今年は、教員学生混合プロジェクトと学生プロジェクトの2つの形で、ステージ各にチームにわかれ、バラ・ガラス・水・光のキーワードを意識しながら中之島バラ園というステージでどのようなアート表現ができるかを試みた。また、製作材料には、エコロジーの視点からガラス・ペットボトルなどリサイクルされたものや、エネルギー消費を抑えバラに影響を与えない発光ダイオードを中心に使用した。制作者は、有志学生たちで舞台芸術学科、演奏学科、工芸学科、デザイン学科、放送学科、建築学科、芸術計画学科、環境デザイン学科の多数の学生の参加があった。

このプロジェクトは学外での実践であり学生の実習の場として参加しており、主体は学生で教員はそのバックアップという姿勢で臨みた。

また、街中のきらびやかなイルミネーションの喧騒の中から抜け出して「アーツアンドローズ」という冬

のバラ園で繰り広げられるアートとバラとのコラボレーションを楽しんでもらうという芸大の姿勢から、参加場所の巨大な光のタワーやリース型アーチで着飾り、多くの出店ブースが出るローズライトガーデンなどの雑踏を避ける形での参加となった。

5. 中之島バラ園制作場所（制作場所の検討、公園担当者との協議）

1）ラジオ大阪との協議

各々の展示場所で、展示内容、展示方法、規模、電気設備について意見交換が行われた。この時点では、大阪芸術大学の出展とその他の出展者との調整が進められ、特に問題は発生しなかったが、公園事務所に対して、説明文書を作成し協議を行うことが話し合われた。

写真 -1　現地説明会

2）公園事務所との協議

公園事務所との協議では、教員、学生の出展作品の内容説明と展示方法について協議を行った。展示については既存施設をどこまで活用出来るのか、植栽されているバラ、植物を傷つけない、植栽管理、電気設備等について協議がなされ、公園事務所と学生、教員が展示方法について白熱した議論を交わし、納得出来るまで話し合いが行われた。公園事務所側でレンガ柱にアンカーを打ち付けてくれるなど、学生展示に協力をしていただいた。バラの小径でのガラス展示は、当初、バラ植栽地に設置を予定していたが、バラを傷つける恐れがあるので、園路に設置することになり、急遽その設置方法の検討がなされた。

バラの庭では、芝生上に、円形にガラスを敷き並べたプラベニヤを設置する計画であったが、芝生を傷めるとのことで、敷き砂をし、レンガを枕にしてその上にプラベニヤを敷き並べた。

高架下では、川からの強風で展示物が吹飛ばされる心配があり、建設現場の足場を使用し壁画を取付けた。公園事務所との協議では、既存施設と植栽、特にバラを傷める恐れのある展示内容には、許可が出されなかった。現場でその代替案について話し合いがなされ、学生は、自分自身の展示内容、方法がどうすれば理解していただけるのか、理想と現実の違いについて直面し、現場で多くのことを学んだ。

写真 -2　公園事務所と立会

(1) バラの小径入口

中之島中央公会堂から中之島バラ園に至る入口で、中央公会堂南北両側から信号を渡り、東洋陶磁美術館前を通って入口に至るルートと信号を渡って直ぐに入口に入る 2 ルートがある。

東洋陶磁美術館前からバラ園入口に、来園者の案内、誘導、チラシの配布を行うために、昨年使用したパラソルとテーブル、椅子を配置し、美術学科で拝借したイーゼルにバラの広場ステージで行われている演奏学科学生の演奏内容を書込んだボードを置き、スポット照明を当てた。

ポスター、チラシで使用した青いバラの絵を布にシルクスクリーンで描き、既存の案内板に取付け、下から照明を当て、浮び上がるようにし大阪芸術大学の取

り組みを案内した。

また、環境デザイン学科学生によって、既存のレンガ柱を利用して、ネットにイルミネーションを蔓状に這わせ、そこにアメリカンフラワーのバラを取付け、さらに、柱間に鎖を取付け、鎖から白、赤、青のアメリカンフラワーのバラを吊るし、レンガ縁の上には、アメリカンフラワーのバラ生垣を並べて設置した。入口の演出としては既存施設を活用して、学生の展示作品と大阪芸術大学の展示であることをアピールする実行委員会の案内表示により最大限の効果を出すことが出来た。

写真 -3、4　バラの小径入口

(2) バラの小径

東洋陶磁美術館の境界壁と川側の植栽地を見ながら広場に至る舗装された園路である。

ここでは、光による誘導と芸大らしい空間演出が必要とされた。

ガラス工芸コースの教員・学生作品の展示が行われた。誘導と空間演出することを目的に細く長い園路の壁に取付ける作品と、芝生地に直置き、スタンド式に設置する 4 タイプの作品が作られた。壁式の作品は、既存のレンガ壁面に取付けられたツルバラを誘引する格子状の鉄筋を利用して手の平サイズの 100 個のガラス作品が釣下げられ使い捨てのLED照明を中に入れて青白く蛍の様に光り壁面を演出した。

川沿いには鉄のフレームにガラスが入り込んだスタンド式の様々な形態のガラス作品が並び、その中に、電池式のLEDライトが入れられ足下を青く照らし出した。残念であったのは周囲の照明が明るすぎて、青く浮び上がり誘導するその効果が半減したことであった。

トンネル入口広場では、巨大な直置きの大小のガラス作品が置かれ、見る人によっては大きなクラゲをイメージされたり、亀をイメージされたりと来園者の注目を浴びた。作品を並べるだけでなく安全のために作品の横に立っていた学生と来場者が言葉を交わし説明する姿に作品を通して交流が確かに生まれていた。

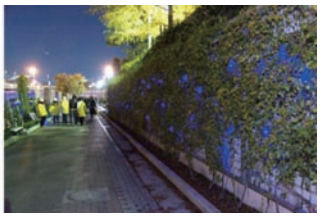

写真 -5、6　バラの小径

(3) バラのトンネル

バラの小径からバラの広場に至るトンネルは、バラの小径から緩やかに右に下り、半円状の下部から両側にレンガ積み壁が人の腰まで立ち上がり、その上に人が入れる程のテラスがトンネル壁に向かって設けられている。レンガ積み壁の上に設けられたパイプ柵、テラスを利用して参加形のバラが咲乱れる「バラのトンネル」が企画された。パイプ柵にアクリル板を取付け、アクリル板に向けて投光し、そこに、来場者によってトンネル入口で制作した様々なステンシルのバラを貼付けて行き、トンネル内が徐々にバラによって咲き乱れ大輪のバラが完成するものであった。

バラの小径からバラ園に抜けるトンネル内では、芸術計画学科学生により、参加型のバラのオブジェが日毎に咲きトンネル内を明るく染めた。トンネル入口広場にテーブルを配置し、そこで来場者に学生が用意したバラのパーツを組合せ、バラの花びらを作成しトン

写真 -7、8　バラの小径からバラの広場へ

ネル内のアクリルパネルに貼付けて行く流れであったが、23日、24日と多くの参加来場者で学生が用意していたシールが無くなるほどの盛況ぶりであった。

(4) ばらぞの橋

バラの広場からバラの庭に至るばらぞの橋は、ここから両側に川面、橋中央ではバラの広場、バラの庭を眺め見下ろすことの出来る重要な景観ポイントの場所である。さらに、ここでの光の演出が剣先公園まで人を呼び込み、導く光の案内役を兼ねていた。当初、川面に浮かぶバラをなんとか映像で表現出来ないか、もしくは、水のスクリーンに投影出来ないか、と様々な演出、技法を検討したが、予算の問題、水面に投影しても水に光が吸収されて浮かび上がらない、霧上の水幕にしても強風のため幕にならない等の技術的な問題で実現出来なかった。建築学科、環境デザイン学科学生の企画で、橋の両側に6基の水槽を配置し水を入れ、水槽内に紙で作られたバラを水に浮かべ、ブラックライトの光に浮かび上がるバラを演出した。多くの来場者は、ブルーの水中に浮かび青白く光るバラに不思議そうに水槽を覗き込んでいた。

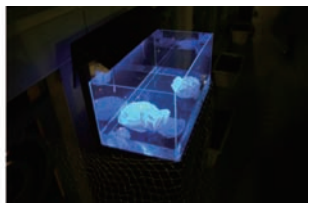

写真-9、10　ばらぞの橋

(5) バラの庭

バラの庭は、中央部を盛上げ、高さ約5mのブロンズ製照明柱を中心に円形のバラ花壇とその周囲を芝生、周りを園路とし、さらに、その周りは芝生とバラ、樹木が配植された植栽地に取り囲まれたまとまりのある静的な中心性とシンボル性のある場所であった。環境デザイン学科教員、環境デザイン学科・デザイン学科学生により、バラをテーマにしたガーデンスケープをテーマに「バラの庭」を冬の光に映し輝く「硝子のバラ庭園」として表現することをコンセプトとし、廃棄された様々なガラス瓶、ガラス材を集め、細かく粉砕、摩耗し、バラの庭中心の芝生サークルにガラスを敷き詰め、その下に光りを廻らせ、バラの美しさをイメージしたガラスに光を解き放し光の薔薇を咲かせるデザインとした。バラの庭の象徴とも言える中心の照明柱を利用して赤とピンク布を交互に巻付け、六角錐のガラスのタワーにして、下から投光器で照らし浮かび上がる幻想的な雰囲気と、空に光が上り詰めるオブジェとして様々な願いが空に向かって上って行く、特に子どもたちへの様々な祈りを込め「イラクや世界の子どもたちへの鎮魂歌」を象徴した。その周囲に青いバラと風車が路上と芝生に青く映り、多くの人々の足を止めた。

若いカップルが、光に照された青いバラと路面に映りだされた光のバラをカメラ付携帯で仲良く撮影し、その数が徐々に増え、その光景が絵になっていた。

写真-11、12　バラの庭

(6) バラの庭高架下

バラの庭から剣先公園に向かう阪神高速の高架下は、高速道路下部の鉄骨とパイプ、橋脚に囲まれたアスファルト園路と土舗装部分で、雨はかからないが暗い場所である。この高速道路下部を利用して、映像による光と音の演出、御堂筋フェスタで展示された壁画を

写真-13、14　バラの庭高架下

アートギャラリーとして活用することにした。映像学科教員と学生、美術学科、環境デザイン学科学生による、音・映像とアートギャラリーが高架下を来場者の目と耳を楽しませるアート空間に変貌させた。

(7) 大阪芸術大学学生によるライブ

大阪芸術大学の学生によるライブをイベント期間中随時開催した。

サキソフォーンなどの楽器演奏で、会場を盛り上げた。

■開催日　12月17日（土）～12月25日（日）
■時間　18：00頃から随時
■場所　中之島公園バラ園ステージ

6. 教員、学生参加呼びかけ

今回のプロジェクトは、一人の教員がディレクター、プロデューサーを務めるのではなく、教員と学生が中之島バラ園全体の企画に基づき、夫々の企画立案と資材調達、作品制作、予算管理、会期中の保守管理、関係機関との連絡等の全ての責任を持って行う組織とするために、教員企画、学生企画の参加募集の呼びかけを行った。

学生企画での呼びかけの方法は、全学科を対象に学内、学科での掲示、説明会を行った。その内容は下記の通りである。

● 開催期間：平成17年12月17日（日）～平成17年12月25日（日）
● 開催場所：中之島公園　バラ園とバラの小径一帯
● 開催時間：17時～21時
● 計画
バラの小径：歩きながら楽しむことのできる光の仕掛け、キャンドル（工芸学科ガラス工芸コース）
ばらぞの橋：橋両側の水面に映像を駆使し、咲き乱れる水中バラを表現（映像学科）
バラの庭：バラをテーマにした全体計画、ガラスの庭（環境デザイン学科・舞台芸術学科）
バラの庭高架下：高架下に天空またたく星座とバラを映像と音により表現（映像学科・音楽学科）
● 参加部門：サウンドスケープ（音の風景）
ライトスケープ（光の風景）
ピクチャースケープ（映像の風景）
パフォマンスアート（演技の風景）
ガーデンスケープ（庭の風景）
● 説明会：平成17年10月5日(水)
● 参加締切：平成17年10月26日(水)まで
● 製作：平成17年11月7日(月)～12月10日(土)頃
● 作品搬入：平成17年12月10日(土)予定
作品搬出：平成17年12月25日(日)展示終了
● 受付先：藝術研究所事務室12号館3階

1）各種打合せ

大阪芸術大学（アーツアンドローズ実行委員会）[4]、大阪市、OSAKA光のルネサンス実行委員会、ラジオ大阪、教員、学生等との打合せが行われた。

大学での打合せでは、昨年度の内容、予算、大阪市との関係、学生募集、教員募集について打合せが行われた。

大阪市との打合せでは、全体スケジュールと大阪芸大担当場所の確認、展示内容について打合せが行われた。

ラジオ大阪との打合せでは、具体的なライトアップ内容、実施運営、現場作業内容について打合せが行われ、予算は、内容を決定し実施、運営予算を作成し打合せを行った。

7. 企画

教員・学生企画

バラの小径（工芸学科ガラス工芸コース）
バラの庭高架下（映像計画学科）
バラの庭（環境デザイン学科）

学生企画

バラの小径入口（環境デザイン学科）

バラの小径トンネル（芸術計画）

バラ園ステージ（演奏学科）

ばらぞの橋（建築学科、環境デザイン学科）

バラの庭（環境デザイン学科、デザイン学科）

アートギャラリー（環境デザイン学科、美術学科）

剣先公園ペットボトル（環境デザイン学科）

8.　教員・学生作品搬入設置

写真 -15、16　バラの小径入口

写真 -17、18　バラの小径、ばらぞの橋

写真 -19、20　バラの庭

写真 -21、22　バラの庭高架下、剣先公園

9.　会期中の対応

期間中毎日交代で手直しや見回り警備をしたが、作品は、小物が多い上に柵がないので簡単に人が入ったり作品に触ったり出来、そのため、毎日手直しをするほど出展作品が荒らされていた。今後は、この点を工夫する必要がある。

写真 -23、24　保守点検

10.　広報（開催前、開催中、開催後）

学生によるデザインのチラシ 50,000 枚とポスター 5,000枚、ビラ20,000枚を印刷し、開催前にチラシを関西圏の関係各所に送付した。開催期間中には、アーツアンドローズの作品配置地図記載のビラをバラの小径入り口で来場者に配布した。

この配布には作品製作者である学生が行い、来場者へ作品のアピールをした。また光のルネサンス案内所にビラ・チラシを設置してもらい配布し、結果、ビラ 20,000 万枚・チラシ 50,000 枚を配布し終えた。また、ポスターは地下鉄や京阪電車の駅に貼られた。

作品の設置場所が非常に広い場所であることと広範囲に分かれて展示していたことから大阪芸大の作品ということが来場者に伝わりにくいことがわかり、開催期間中に、急遽看板を製作し設置した。

OSAKA 光のルネサンスのホームページから芸大 HP へリンクをお願いしインターネットからアーツアンドローズの概要と地図を見られるようにした。

ラジオ大阪の番組のバラ園からのラジオ生中継に学生が出演し大阪芸術大学プロジェクトの PR と OSAKA 光のルネサンスの PR をした。

開催期間後ラジオ大阪のジャムジャムストアにて大阪芸術大学の学外イベントのひとつとして紹介された。

11. 今後の対応

非常に広範囲な展示であったため芸大の作品と認識してもらいにくかったことから看板は当初から作品の一部として、設置するべきであった。

作品設置場所は、人通りが多く周りの光や音も多いため今後、作品の光の量や大きさなどを考慮する必要がある。

人の多さではバラのトンネル周辺で人が溜まってしまい危険なためバラのシール造りを中断する場面があったためこの場所での催し方は改善する必要がある。

寒い中のチラシの配布は学生にとって非常に辛いものであったかもしれないがそこから参加学生どうしの協力関係や自分たちの作品を見てもらおうという気持ちが来場者に伝わったと思われるのでチラシの配布は継続することが良いと感じた。

ラジオ大阪との協議から急遽バラ園ステージでの学生音楽ライブが決定したこともあったが結果的に学生による演奏を多くの来場者に聞いてもらうことができた。

12. おわりに

期間中、学生たちは2万枚以上のチラシを来場者に配布し，展示作品による事故がないように安全性を確保するために警備し，毎日昼に作品を展示し夜に回収するなど，制作のみではなく開催期間中の運営に関しても行った。

作品を作る過程や開催期間中に活発に行われた議論，開催期間中の来場者の皆様や中之島バラ園の皆様との関わりや，中之島バラ園という学外での制限のある環境での作業の中で，このプロジェクトに参加した学生たちは多くの経験を積むことができ成長できたと考えている。

中之島バラ園という公共の場で作品を制作展示する機会を与えて頂いた塚本邦彦理事長・学長をはじめ様々な場面で力添えを頂いた工藤皇事務局長、作品展示や開催期間中に多くのご理解とご協力を頂いた中之島バラ園の皆様や来場者の皆様、また、このプロジェクトにご協力をいただいた皆様に深く感謝いたします。

注

1）OSAKA 光のルネサンス実行委員会
関西電力(株)、大阪市ゆとりとみどり振興局、学校法人塚本学院 大阪芸術大学、(財)大阪観光コンベンション協会、御堂筋まちづくりネットワーク、(株)日建建設、大阪商工会議所、水都ルネサンス実行委員会、英国文化研究会、(財)21世紀協会、(社)関西経済連合会、京阪電気鉄道、計12団体で構成

2）OSAKA 光のルネサンス 2005 実行委員会資料

3）OSAKA 光のルネサンス 2005 実施結果報告書

4）アーツアンドローズ実行委員会
工藤皇(大阪芸術大学事務局)、松下陽子(大阪芸術大学藝術研究所)、塚本英邦(教養課程)、山野宏(工芸学科)、河野正孝(演奏学科)、浅尾芳宣(映像学科)、堀内充(舞台芸術学科)、狩野忠正(環境デザイン学科)、福原成雄(環境デザイン学科)、若生謙二(環境デザイン学科)、学生企画責任者で構成